

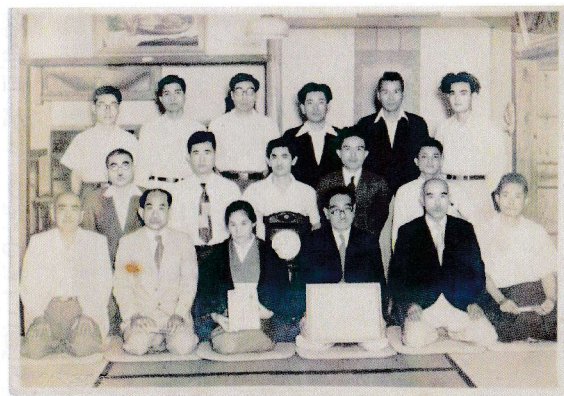
長い歴史の一区切りを飾る貴重な記念誌

大島 信 徳
(中勝出身)

東京龍郷会創立100周年記念誌の編纂発行おめでとうございます。長い歴史の一区切りを飾る貴重な記念誌となるとでしょう。

さて、なにか龍郷の思い出を綴ろうと思うのであるがなかなかまとまらない。僕は実は名瀬で生まれ育った。学校も名瀬で、旧校とよばれた小学校を出、旧制の大島中学校を卒業し、昭和十三年十七歳のとき島を離れた。その後は鹿児島で旧制七高を終え、昭和十六年東京に出て東大工学部航空学科に入学、卒業してすぐ同学部に勤めて以来、ずうっと東京に住み続けている。島を離れてからもう六十七年が過ぎたわけで、過去を想えば茫々としてとりとめもない。

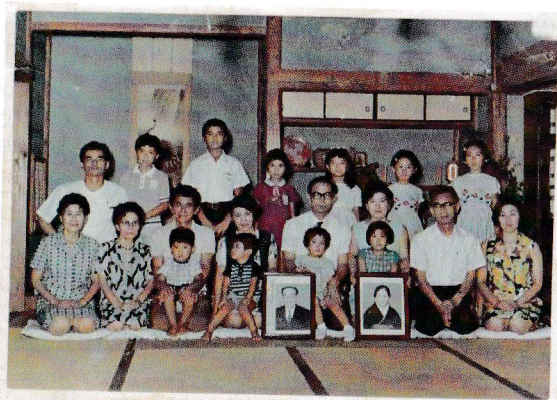
では龍郷の思い出は少しもないのかというと、そうでもない。父は中勝の生まれ、



大島信礼、きく（両親—中央2人）、兄、信章（右後方）と親戚

母方の祖母も中勝の福田家の出なので、血統的には私はほとんど完全に龍郷中勝人なのである。両親のところには龍郷や中勝の人たちの出入りも多く、また、田舎から送られて来た塩づけ豚肉が軒先きに吊り下げられていたり、ガチンガチンで五寸釘も打ち込めないような固い黒砂糖の樽があつたり、庭先に生つたらしい文旦がいくつも転がっていたり、中勝の雰囲気はいつも充満している。そういう身近な中勝なので私の本籍はいまだに中勝三十番地のままである。急場の用に間に合わなくて家族を困らせているが、こればかりは固守する積もりである。

また実際の龍郷を知らないわけでもない。小学三年から中学二年ごろまで、たいていの年夏休みに中勝を往復している。泊り先は伯父の家で茅葺き石油ランプだった。これは当時の集



信徳、ご両親の3年忌の法要

前列： 砂泊初枝、嘉野節子、(大島) 信章と
勲、和子と篤、信徳と美奈子、初子と礼子、信
正、加代子。 後列： 巖、彰、いつま、奈都
子、まり、かおる、貴久代

かし同じ所をグルグル引張り廻すそうである。同じような景色が続くので、不用意に腰を下ろして一休みすると、立ち上がって一歩踏み出す時足の向きが来た道の方向であつたということ大いにありそうな気がする。こんな道が半里ほども続いて道は東にゆるゆると降っていく。疎林の中である。湿ったような所ではハプが大急ぎで路を横切つて藪に身をかくしたり、ルリカケスが羽音高く木々の間を飛び廻つたりで退屈はしない。やがて急坂を中勝川に降りて中勝に着く。

中学に入ってからの中勝行きは単独行だつたと思う。一週間ほどの長滞在もした。従兄弟や同年輩の少

落全戸がそうだったと思う。馬小屋があつたり、屋敷の横に川の水を引いて家鴨が群れていたりが珍しかった。道向かいの従兄弟の家には果樹も多く小さな畑もあり、その先の山の上に我々の先祖の墓がある。墓参りは欠かすわけにはいかない。

小学三年のときの最初の中勝は、帰省していた大学生の兄にくつついて行つた。分茶峠を越える三里の山道である。本茶より分茶の方が僕の耳には馴染みがいい……分茶峠までの道は、時々近道もするがだいたい県道である。初めての時の強い印象がある。峠に近くなつたある曲り角で突然視野が開ける。瞬間目の前の山並みの逆三角形の窪みに、盃になみなみと注いだように海が盛り上がり、しかもその上に山より高く平たい島が見える。信じられない光景だつた。あれが喜界島だよと兄が言つた。

峠には茶屋が一軒あつた。ここで大勝への県道と中勝へ行く山道は直角に分かれる。ふつう峠は山々の鞍部を越えるもののだが、この分茶峠は、北は今井岬から南は瀬戸内まで大体標高300メートルを保つて延びる大島本島の大脊梁山脈の稜線越えの峠なのである。従つて三六〇度の展望を得ているのだが、稜線伝いに南に延びる中勝への道も至極坦々としたものである。ここは長原とかよばれてよく狐が出て人を化

年達に誘われて中勝川上流のサタ焚き小屋に遊びに行ったり、アウンの浜に行つたのもこんな時だったろう。アウンの浜は忘れられない。田圃を越え川を渡り細い野道を進んで、最後に分厚いアダンの茂みを潜ると急に白い砂浜に出た。ちょうど退き潮なのかサング礁が海面に浮き上がっている。飛び移って割れ目を覗くと、色鮮やかなサングの中を派手な模様の小魚が勢いよく泳ぎ廻っている。こんな美しい海を見たのは初めてだった。サング礁を端から端まで跳び廻った。あれは本当に秘境と言つてもよいものだ。後年思うことだが、あのサング礁だらけで船も寄り付かない人も住めない小さな浜は、奄美には珍しく海を持たない集落である中勝の人が自分の浜として大事にこつそり守っていたのではないかと。

中勝から瀬留の親戚の大山愛熊さんの家を訪ねたこともある。誰に連れられたのか覚えていない。浦の橋立てなる一列に綺麗に並んだ松並木の長い堤や透し目などを見たのもこの時である。夜、五歳上の大山麟五郎さん（後に奄美史研究の第一人者になる）が手長エビ探りに近所の川に連れて行ってくれた。戦果のほどは覚えがない。翌朝海縁りをアダン崎あたりまで歩いて波静かで美しい龍郷の海を眺めた。瀬留は役

場があるせいか整った感じのする集落だった。

今までどこへ行ったとかあそこを訪ねたとかいったのは、みな自分の足で歩いてのことである。昭和の始めのころは奄美ではまだ自動車はなかったのではないか。乗合自動車という名を聞くのも中学に行ったところからのような気がする。もともと県道の道幅や勾配は車を意識して設計されているだろうから、あったかも知れないが僕は島を離れるまで車を利用したことはない。歩くことが当たり前であった。

名瀬の小学六年のとき修学旅行があった。二泊三日の赤木名往復である。第一日は八里（三十二キロ）の道を赤木名ま直行、宿屋泊。第二日は半日宇宿の砂丘で遊んで赤尾木で民家に分宿。第三日は浦でしばらく休憩、松並木の由来や西郷さんのことなどを学んだ後、再び分茶峠を越えて名瀬に全員無事帰着。これも僕の楽しい龍郷の思い出の一つである。

埒もない思い出話しが思いのほか長くなりました。